



## コロナ禍に大学で経験したこと学んだこと

神戸大学 経済経営研究所  
教授 下村 研一

2019年6月、十年ぶりに転居をした。そして2023年の今年9月、ふたたび転居することになった。この四年間は、精神的には前の家で過ごした十年間に匹敵するような気がする。理由は他にもない。コロナ禍の始まりから「感染症2類相当から5類相当への移行」までの期間がすっぽり入った四年間であったからである。さらに、自分としては同じ長さの期間でも、多くの新しい経験をした期間は長く感じられる。今回は未曾有の経験だけであったこの四年間の大学で起こったこと、そして少しだけ今後の自身のことを書きたい。

「広域情報：新型コロナウイルスに関する注意喚起」という当時一体何のことだかわからない件名のメールが届いたのは2020年1月22日のことである。1か月後に予定されていた海外への出張に備え外務省の情報配信システムに登録したことによるもので、私の行き先は中国ではなかったが、用件は中国の武漢での感染症に関する情報の自動配信だった。武漢での新型肺炎の流行はニュースとして認識していた。それから日本でも、観光バスやクルーズ船でのウィルス感染のニュースなど、徐々に感染に関する報道が増えていった。

2月3日に神戸商工会議所で神戸大学経済経営研究所との共催の講演会が開催され、私は会の幹事だった。会の中止やマスク着用などの話は皆無で、講演会は盛況。まさに「密」だった。講演会場から大学に帰る車の中で、今マスクをネット販売に出すと中国の人が高い値段で買ってくれるという話が出た。翌月「マスクの転売は禁止」になるという発想は、その場にいた経済学者と経営学者の脳に1ミリも存在しなかった

私の海外出張は2月16日から20日まで予定通り行われた。現地の何人かの人から「日本では新型肺炎の流行が始まったのか」と聞かれた。私は「ごく一部だ」と答えた。出張中届いたメールで、日本で行なわれた教授会では出席者の3分の1がマスク着用であったと知らされた。帰国後、さまざまな研究会や退職教員の最終講義の中止を知らせるメールが日に日に増えた。だが、それらは「自粛」によるもので、予定通り実施されたものもあった。

大学全体の動きが変わったのが、2月26日に安倍晋三首相から公式にスポーツ・文化イベントの中止・延期を要請する方針が示されてからであった。大学の内外からそれまでに増してイベントの中止や延期の決定を伝えるメールが続々と送られてきた。私は3月2日・3日に東京から講師の先生をお呼びして神戸で行われる集中講義の幹事も務めており、判断に躊躇したが、事務からの強い要請があり、やむなく学生と大学院生と他大学の先生方には中止の連絡をし、講師の先生と原則神戸大学の教員のみでの少人数の勉強会に切り替えた。さらに3月3日には神戸大学の卒業式の中止が決定した。この頃から大学は出口の見えないトンネルに入る。大学は構内を歩く人の姿が全く見えないゴーストタウンと化した。

報道もコロナ一色となり、中でも3月29日コロナによる肺炎でコメディアン志村けんさんが亡くなったニュースには、46年間テレビで元気な姿を見せ続けていた人が突然いなくなってしまうことにとつもない喪失感を感じた。この件以降の私は、有名人・知人・友人の急逝の訃報が舞い込む度にコロナで亡くなったのではないかと、どうしても考えてしまうようになった。

新年度になり大学の会議と授業が「オンライン参加」という形で始まったのは、それぞれ4月15日と5月7日だった。4月15日開催の教授会では、議題の審議に加えてオンラインによる投票まで行なわれた。所長から「投票者の匿名性が守られるアプリです。既に法学部の教授会で使用され機能は確認済みです」という説明があり、「投票をお願いします」という指示を受けパソコンから「送信」という形で投票が行われた。当初大学によって会議はオンラインでも投票は郵便でというところもあったことを後で知った。

ゴールデンウィーク明けの5月7日に大学全体でオンライン授業が始まった。現在オンライン授業で使われているアプリの種類は2つほどに絞られているが、当時は4種類のアプリが紹介され、最初に使ったアプリが機能しなかったらあるいは途中で機能しなくなったら、他に切り替えるよう事前に連絡があった。私が第1クォーター(4月・5月の2カ月)で担当した大学院の経済理論の授業は初日の開講ではなかったが、初日1つのアプリがほとんど機能しないという情報がメールで配信されたので、私はそれ以外のアプリを使って授業をすることにした。

それまでの私のオンライン授業のイメージは、NHKの教育テレビやYouTubeの教育動画に出てくるスタイル、つまり教師が黒板や白板に板書したり、磁石付きのカードを張り付けたりして授業をする様子を固定カメラか他人のカメラで撮り、遠隔の受講生がパソコン画面で見る方式であった。もちろんそれでも可能ではあるが、大学の動画で紹介されたパソコンのアプリを使った授業は全く違った。私の第一印象としては、「プロジェクターを使ったパワーポイントのプレゼンに似ている」であったが、教師が小さなワイプで映り、話しながら画面のスライドに字や図を書けることは、思ったより見る方は学びやすいのではと思った。この授業方式についてもYouTubeの同方式の教育動画は大変勉強になった。しかし、スライドを送信しただけではたとえ授業をしっかり聞いても流れを自分で再現することは難しいだろうと判断し、(あくまで私の力の範囲で)行間の論理も書き出した詳細な講義録をワードファイルで作成して配布した。さらにコロナ禍前までは講義録に載せた練習問題について質問に来る受講生には、授業の後に教室の黒板で、あるいは研究室のホワイトボードで教えていたが、対面で教えられないので、(あくまで私の力の範囲で)懇切丁寧な解答集を作成し、PDFにして全員に送信した。さらに配布しただけでは理解しているか不安に思い、試験の2日前に練習問題の解答の要点の解説をオンラインで行った。期末試験は8月26日対面で行われた。受験者も監督者もマスク着用必須で、教務係の方々が教室の椅子と机を徹底的に消毒してくださった。受講生のほとんどがその日初めて会う面々で、文字通り「初対面」となった。そして、試験の結果は例年に比べると全体として良くなかった。

翌2021年度第1クォーターの大学院のオンライン授業は、内容を全く変え、学部生にもわかるように技術的に相当易しくした(つもりであった)。「これなら学部生でも勉強すれ

ば絶対わかる」と判断し、大学院科目でありながら学部生も履修登録して試験を受け合格点を取れば単位が取れるようにした。事実受講生 23 名中半分強の 13 名は学部生となった。授業の方式は前年度と同じで、内容は違うが（あくまで私の力の範囲で）詳細な練習問題付講義録と懇切丁寧な解答集を配布した。ただ、この授業でほとんどの受講生のオンラインのビデオ画面は授業中終始オフであったことが気になった。期末試験は 8 月 24 日対面で行われた。前年度に比べ授業内容が易しくなった分、試験問題も易しくなった。前年度と同じく、試験会場の教室の椅子と机は徹底的に消毒された。だが、結果は良し悪し以前の問題であった。登録者で学部生 13 名中受験者 2 名、大学院生 10 名中 4 名、7 割強が不受験となった。前年度と異なりほとんどの受講生と「初対面」すら叶わなかった。教務係の方々の話だと、他の科目の試験も似たような状態で大量の不受験者が出たとのことだった。印刷した試験問題と消毒された椅子と机の多くは使われず無駄になった。唯一の救いは、その少ない受験者の成績は全体として良かったことであった。

そして、2022 年度と 2023 年度、つまり昨年度と今年度、授業は対面に戻った。開講対象も学部生の履修登録をなくしたので、受講生は大学院生だけになった。授業内容と技術水準もコロナが始まった 2020 年度のものに戻した。2023 年 5 月 8 日、新型コロナウイルス感染症が感染症の 2 類相当から 5 類相当になり、教室からマスク姿が徐々に減り始めた。ただ、オンライン授業のための講義録と練習問題の解答集は対面になっても配布した。さらに、クォーター制からセメスター制（前期と後期の二期制）になり、学期が長くなったので中間試験の実施が可能になった。したがって、「オンラインから対面」という変化とともに「クォーター制からセメスター制」という変化も起きたため、完全な対照実験にはならないが、授業の受講生数も試験の受験者数も格段に増え、試験の成績は全体的に非常に良くなった。受講生が授業に対面出席し、授業後に他の受講生や私と授業について少しでも話をし、その上で講義録と練習問題と解答集を一生懸命勉強した成果が形となって表れたのだと思う。（なお試験が良く出来ても試験後脳細胞が iPS 細胞のように初期化され受講生が授業の全てを忘れるようなことがあっても私は受け容れる。「にんげんだもの」(相田みつを)と)。

以上はコロナ禍という望まない事態の到来により行われた対面とオンラインの教育効果の壮大な実験の記録である。受講生の側は教師が自分を見ているかも知れないという緊張感を持ち、教師の動きや表情を見ることで授業のめりはりを感じることができる。教師の側は教室の空気を読み、それに合わせて話す速度と内容、板書量などを調整できる。対面授業は、いわゆる「Win-Win」の関係を受講生と教師の間で構築可能にするのではないか。

私はこの経験を通じ、1970 年代 80 年代に「テレビ局のカメラの前では歌う気がしない。ライブのファンの前でなら喜んで歌いたい」と言っていたミュージシャンたちの気持ちが漸く理解できた。私はまもなく神戸を離れ、秋から別の大学で教鞭を取るが、ミュージシャンのライブのような「Win-Win」の授業を心がけようと思う。そして、そう言っていたミュージシャンたちが今なお現役で歌っているように、私も長く現役でいられたらと考える。